

見学記

大分市近郊の史蹟と

伊勢神宮宝物展を見学の記

会長 馬 水 嘉 士 吉

四月十三日、かねての計画はしたがって標記の見学を行つた。大分バスターミナルに午前十時までに集合の手筈で身つた。出席者を把握していきかつたので、マイクロボス借切の都合で多すぎても少なすぎても困るが、と案じていたが、結局左記十七名が集つて丁度よい人数になつた。

(参加者) 北村、佐藤、岩田(南)、天野、柴田(南)、柴田(南)、高野、高野、平川、合夫人、河野(南)、辰谷、平田、上杉、市野(順)、吉田(南)、高水、

立川先生の御幹旅で、渡辺克己、藤井幸良両氏が迎えて案内して下さり、格別な交歩でマイクロボスも安く御世して頂き、待ちうけていてくれ左つは有難いことであつた。

バスは快速に走つて大道の新トンネルをくぐつて南大分に伺い、石城川の白殿古墳に着く。凝灰岩を掘り抜いた岩室の中に、大きな石棺が安置されてゐる。古代豪族の墳墓であることは間違いないが、出土品もなく記録の微すべきものもなく、正確なことの分らないのは残念である。古墳の入口の板碑二体も立派なものであるが、何等の記録もなく、見る人の想像をそそるのみである。

千代丸の古墳。千代丸は地名であるが、何かいわれがありそうに思つた。型式は正殿古墳に似てゐるが、内部の梁(はり)に当る部分に線彫の装飾が施されてゐる。素人の考察で当らないかも知れないが、凝灰岩の台地に先ず彌口ニ米、奥行四米、添十一、五米位の溝を掘り、上部を巨大な凝灰岩の梁状で覆い、更に大きく土を盛つて

古墳と見られる。盛土は周囲を削り取られて耕地となり、形が小さくなつて今は入口が露出してゐるが、成立當時は巨大な古墳が千代丸の丘陵上に仰がれたものだろう。正殿古墳も同様であつたろうと思われれる。

渡辺さんから伊勢神宮宝物展の見学のことと話を承りながら、之を左手に持してバスは国分寺跡に向かう。

重後国分寺跡。これは今日の見学の圧巻であつた。案地を踏査せぬは話ば出来ぬといつても思つてゐることがここで又それを痛感した。礎石の今も荒廢した敷地を想像してゐたが、鬱蒼たる木立の中に、昔の金堂跡には薬師如来を祀つた御堂が、又大重塔跡には観音菩薩を祀つた御堂が、ささやかだがなかり荒れてはゐるが建つてゐる。金堂及び七重塔跡の礎石は壘半量を超えたる巨大なものが使われており、此の礎石をふまえた雄大壯麗な堂塔が思はれる。渡辺氏及び任職氏から承つて、重後国分寺の認識を深めた。天平の創建以来何回かの栄枯を繰り返して返したが、天平十四年島津軍の侵入の際兵火で全焼して衰亡の途をたどり、徳川中期にささやかな堂宇が建立されて今日に至つてゐるとのこと。檀家のない上に寺領として保存してゐた敷地も、他改革で人手に渡り、寺の維持経営に困つてゐるとはおもしろいことである。

国分寺跡の見学を終れば十二時、見学予定地二、三を覗いたが、午後伊勢神宮宝物展の見学に支障を来してはけくないので、他は後日のことにして大分に戻り返した。渡辺、藤井両氏並に飯格的にお世話を下さつた立川先生に、会長と共に深く謝意を表す次第である。

午後伊勢神宮宝物展を見学した。詳細は展覧期間中主催者の大分合同紙上に掲載されてゐるので、拙記をひかえない。去る所感二、三を記して責をふさぐことにする。先づ此の展覧会を雨催して下さつた主催者に感謝した

い。伊勢神宮に参拝したからと言つて拝観出来る品ではない。かりに拝観出来るとしても内宮、外宮及びそれ以外の別宮に、その由来にしたがつて眞深く秘蔵されていゝるものであつて、それだけのものを拝観するには多大の時日を要するわけである。それが至近の大分市に一室に集められ、手際よく陳列されて思うままに観覽出来たことは有難いことであつた。

第二に伊勢神宮は、何事のおはしますかは知らぬにもかたじけなさに濟こぼるる、日本民族の心の古里であるが、その神宮にそれだけの由来にしたがつて、長い歴史と背景としてあれだけのものが伝えられてゐることである。史的価値は年経るままに益々増大するであろう。神宮の宝物として、又日本民族の宝として幾久しく保存し、万世に亘つて伝えねばならないものである。

第三はその文化財としての文化的価値である。之は大分合同紙上に度々論ぜられてゐるが、豪華な紋振りかゝの太刀や優美な数々の織物、其他工芸美術の粹を集めた数多の器物等々、唯眼を見張つて感嘆を久しくするのんであつた。

かくて神韻漂う世界に淨化止揚された幾時間かを過したことは、意義深いことであつた。

(おわり)

調査記

直川の村屋、横川赤水をめぐる

文 羽 柴 弘  
俳句 吉 田 雅 雄

これは予定してゐなかつた臨時の現地研修、かねて宿題にしてゐた直川村の横川に出かけることにした。四月の終りから五月の初めに分けて、いわゆる「ゴールデンウィーク」連休の一日、天冠はよし、

じつとしておられるかとはかり、いゝも出かける連中には加まき差立てるといふ急な企画、直川村郷土研究会と合併ということ、体石会員の奔走によりマイワロバスを借用ということ、午前中横川、午後赤水ということになつた次第。

五月五日 多岐の日。幸い絶好の五月晴。午前七時半直川村久留頂に集合。左の方の観ふれば、

平田、高世西藤岡、高木会長、河野吉田、平川、五十川、加藤、羽柴の定連は、秀らしくも平川、山本、西校長さんに、中島町知沢川酒店、河野松男氏の十二名に、世元から山下、柳井の両氏に体石会員の十五名。又益司顧問は官服定光氏を連れて来て、いと、ちやうど程よい人数とはなつた。幸い直川村の

氏がマイワロバスを御提供、終日みずから運転奉仕して下さるといふ、まことに恵まれたことである。

早速みんなバスに乗りこみ横川へと向かう。早速山下氏は柳井氏の書かれた横川地区の案内地調査料を印刷したものを配つて下さる。この御聖意は嬉しがつた。午前中行く先々でこの資料は大変役立つた。

月形をすぎた車中、柳井氏は車窓から左手、山を指さして、文化九年の百姓一揆の際、因尾、仁田派、赤水など、百姓連が集つて鉦太鼓を打ち鳴らし、騒動の発端となつた於流坂(おりのざか)がそこであると言つて下さる。一行はがぜん藩政のころの歴史の中に没入する。

隣り然る尾根が一揆の集結地

幸はまつ直に横川の谷をのび、庵の水で秋元潔氏が案内役に加あつて下さる。川向うには二軒の農家が全く同じように主家、納屋、倉をまじりにまっ白く漆喰を施して並んでゐる。平田顧問が目ざとくそこを見つけて、典型的な日本農家であると言われる。ちやうどと思つた急いで車から降りてカメラに納める。